

B-4

ふぞろいの単語たち：上甌島瀬上方言の語形を左右する3種類の処理単位

黒木 邦彦

要 旨

本発表では、3種類の処理単位が上甌島瀬上方言の語形に関与することを示す。同方言の表層形は、<i> 韻律語において語声調が、<ii> 形態音韻語の次末尾音節において母音延長が、<iii> 語根先頭において有声化・鼻音化がそれぞれ処理されたのちに決まる。本研究は小方言の共時的音韻論・形態論であるが、ここで明らかにした処理単位3種の必要性を踏まえれば、自然言語の出力面の解明や音声合成の精度向上に対する貢献も期待できよう。

1 瀬上方言の社会的状況

鹿児島県大陸側の約40km西方に横たわる^{こしきしま}甌島列島。その一角を成す上甌島の北西に瀬上という小集落が有る(図1)。この集落で言語形成期を過ごした老年層の方言を、本発表では瀬上方言と呼ぶ。同方言は音韻的特徴に富んでおり、長年に亘って、言語学者の注目を集めてきた(上村1941; 1965、南1967、尾形1987a-88b、木部2001a; 2001b、黒木2014; 2019)。

しかし、学界からの注目に反して、同方言は消滅の危機に瀕している。瀬上集落の人口は2019年4月1日時点で139人(84世帯)に過ぎず、1960年当時の970人に比べると、85%以上も減っている。その上、現人口の59.0%は65歳以上である。高度経済成長期前の集団就職で相当数(1,000人超か)の瀬上方言話者が阪神地方などに移住しているが、彼らを含めても、次世代への言語継承は行なわれていない。発表者の知る限り、10年近く前に年金相談か何かを流暢な瀬上方言で行なったという、当時30代の話者(母語話者たるかは不明)が最年少である。

残念ながら、現時点では、瀬上方言を学ぶことの必要性も利点も、言語学者以外にとっては極めて小さい。言語継承活動の労力と現代情報



図1 瀬上および甌島列島の位置

表 1 瀬上方言における音素の弁別的素性および異音

母音音素					モーラ音素						
					N [+nas]	ant: anterior	dor: dorsal				
					Q [-nas, +c'st]	c'st: constrictive	grv: grave				
					Front	Central	Back	c'ta: contact	lab: labial		
					High			c'ti: continuant	plt: palatal		
					Mid / Low						
+	+				i [i]			u [u]			
-	-				e [e]	a [ɐ]	o [o]				

子音音素													
						lab	grv	plt	dor				
						+	-	-	-	-	-	-	
						+	-	-	-	+	+	+	
						-	-	○	+	-	-	-	
						-	-	○	+	+	+	-	
c'st	c'ta	c'ti	nas	ved		Bilabial	Alveolar	Palato-alveolar	Palatal	Velar	Glottal		
+	-	-	-	-	Fricative			s [s(i)]				h [ɸ ~ h]	
+	○	-	-	○	Affricate			c [z(i) ~ ts(i)]					
+	+	○	○	+				z [nʲ ~ dz(i)]					
+	+	-	-	-	Stop	p [p]							
+	+	-	-	+		b [b]							
○	+	-	-	○			t [ɾ ~ t]						
+	+	-	-	○							k [g ~ k]		
+	+	○	○	+			d [n ~ d]				g [ŋ ~ g]		
+	+	+	+	+	Nasal	m [m]	n [n]						
-	○	-	-	+	Tap		r [ɾ]						
-	-	-	-	+	Approximant	w [w]				j [j]			

- i. 他の現代日本語方言とは異なり、歯茎摩擦/破擦系音素に続く母音音素 /u/ も円唇で実現。しかし、その調音点、とりわけ、舌端が^{alveolar ridge}歯槽提に接触するか否かについては、^{palatography}口蓋図法および^{linguography}舌図法による調査 (青井 2012; 2017、松井 2016; 2017 参照) が俟たれる。
- ii. 接近系音素 /w/, /j/ はそれぞれ独立の子音音素ではなく、母音音素 /u/, /i/ の変異。
- iii. 子音音素 /t, c, k/, /d, z, g/, /h/ の異音条件はそれぞれ「母音間であるか否か」「共鳴系音素 (瀬上方言においては母音音素ないし鼻腔系音素) に続くか否か」「/u/ を伴うか否か」。
- iv. 母音間の /t/ は舌尖音 [ɟ, d] でも実現。
- v. 上村 (1965) に拠れば、母音間の /c/ は、閉鎖を伴う [d͡z] で実現していたらしい。

科学の水準とを踏まえるに、このような小言語・方言の保存・継承には魅力に富むトーカロイドの作成・公開が有効ではなかろうか。

2 瀬上方言の音韻

瀬上方言の音節構造は図 2 を、音素目録は表 1 を、日本語との子音対応は表 2 を参照されたい。

表 2 瀬上方言と日本語との子音対応

	<i>p</i>	<i>b</i>	<i>m</i>	<i>w</i>	<i>s</i>	<i>z</i>
母音間	h [ϕ ~ h]					z [nʲ]
鼻音後	p [p]	b [b]	m [m]	w [w]	s [sʲ]	z [nʲ]
ほか	h [ϕ ~ h]					z [dzʲ]

	<i>t'</i>	<i>d'</i>	<i>t</i>	<i>d</i>	<i>n'</i>	<i>n</i>
母音間	c [z]	z [nʲ]	t [r]	d [n]	z [nʲ]	d [n]
鼻音後	c [ts]	z [nʲ]	t [t]	d [n]	z [nʲ]	d [n]
ほか	c [ts]	z [dzʲ]	t [t]	d [d]	n [nʲ]	n [n]

	<i>r'</i>	<i>r</i>	<i>j</i>	<i>k</i>	<i>g</i>	<i>h</i>
母音間	j [j]	j [j]		k [g]	g [ŋ]	
鼻音後	??	??	j [j]	k [k]	g [ŋ]	h [ϕ ~ h]
ほか	z [dz]	d [d]		k [k]	g [g]	

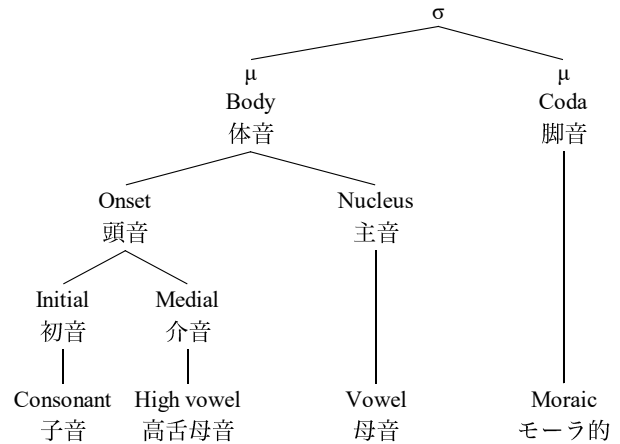


図 2 瀬上方言の音節構造

語彙的韻律は、次に挙げる 2 種類の型から成る語声調である。

- (1) 瀬上方言の語声調 (上村 1941; 1967、南 1967、尾形 1988a、木部 2001a 参照)

A 型 {H₁L₁H₂L₂#} (右端からの付与を # で表示): <i> 韻律語の末尾モーラに L₂ を、<ii> 次末尾モーラを含む音節の主音に H₂ を、<iii> H₂ の前方に位置するモーラに L₁ を、<iv> H₂ の前方にモーラが複数個有れば、先頭モーラにのみ L₁ を付与。

B 型 {H₁L₁H₂#}: <i> 韻律語の末尾モーラに H₂ を、<ii> H₂ の前方に位置するモーラに L₁ を、<iii> H₂ の前方にモーラが複数個有れば、先頭モーラにのみ L₁ を付与。

L₁ および H₁ の付与は、窪菌 (2012; 2016) が示す下甕島手打方言のそれともしばしば一致する。即ち、<i> H₂ に先行するモーラを含む音節の主音に L₁ を、<ii> 残りの音節に H₁ を与える (e.g. <A 型> [mo.jo:↑rot↑te↑ne↑:] H₁.H₁H₁.H₁H₁.L₁.H₂L₂ ‘貰ったから’; <B 型> [me:↑ŋe↑:] H₁H₁.L₁H₂ ‘眉毛’, [dz̄i.n⁽ⁱ⁾e:↑ke:↑ŋ^ji] H₁.H₁H₁.L₁L₁.H₂ ‘自在鉤’)。

3 語形を左右する 3 種類の処理単位

3.1 韻律語: 語声調の処理単位

述部、補部、付加部などとして機能する統語語は、2 種類の下位単位を共にひとつ以上内包する。そのうちのひとつは、語声調を反映する韻律語 (その境界は #) である。次のとおり、これは統語語とほぼ一致する。

(2) 語声調より見る韻律語

- | | | | |
|---------------------------|------------------------------|---------------------------|---|
| a. [ne ⁺ .:zu] | b. [ne ⁺ .:zu.ŋe] | c. [kə ⁺ .:gu] | d. [kə ⁺ .d̄.de ⁺ .:] |
| {nacu} | {nacu&ga} | {kak-u} | {kak-u=dee} |
| 夏 | 夏&NOM | 書 _レ -NPST | 書 _レ -NPST=CSL |
| ‘夏’ | ‘夏が’ | ‘書く’ | ‘書くから’ |
-
- | | |
|--|--|
| e. [wɛ.ju.:ro ⁺ .:g ⁺ i ⁺ ge] | f. [tsu.nu.mɛn.ro:.g ⁺ i ⁺ .:] |
| {wajuw-u=toki&ga} | {cuzum-a-n-u=toki=i ⁺ } |
| 笑 _レ -NPST=時&NOM | 包 _レ -STM-NEG-NPST=時=TOP |
| ‘笑う時が’ | ‘包む時は’ |

*+: ピッチの上昇/下降 †: B型声調 {H₁L₁H₂#}。これを欠くものはA型声調 {H₁L₁H₂L₂#}

語声調の別 (= A型/B型) は韻律語の第1構成要素によって決まる。ただし、韻律語が補助動詞を含む場合は、例外的に当該補助動詞の第1構成要素に基づく。たとえば、次に挙げる韻律語 (3a-b) は、{(#)coj-} が {-te##woj-} ‘ATT##居_る’ に由来することを踏まえると、{(#)woj-} ‘居_る’ に始まる補助動詞を含むものと解釈しうる。尾形 (1987a: 77-78) がピッチの特異性を指摘する韻律語 (3c-d) も、{(#)je-} ‘得_る’ に始まる補助動詞をやはり含んでいる。

(3) 補助動詞を含む韻律語の語声調

- | | |
|--|---|
| a. [mu ⁺ .sun.n ⁺ o ⁺ .je ⁺ .n#no ⁺ .:] | b. [tsu ⁺ .nu.n ⁺ o ⁺ .je ⁺ .ŋ] |
| {musub(#)coj-a-n-u#doo} | {cuzum(#)coj-a-n-u} |
| 結 _る (#)CONT-STM-NEG-NPST=CNFM | 包 _レ (#)CONT-STM-NEG-NPST |
| ‘結んでないぞ’ | ‘包んでない’ |
-
- | | |
|--|--|
| c. セ ⁺ -ワ ⁺ キエ ⁺ ナ ⁺ - | d. ケ ⁺ -ワ ⁺ キエ ⁺ ナ ⁺ - |
| {se-e=wa(#)je-n-u=a} | {ko-e=wa(#)je-n-u=a} |
| す _る -STM=TOP(#)得 _る -NEG-NPST=CNFM | 来 _る -STM=TOP(#)得 _る -NEG-NPST=CNFM |
| ‘出来はしない’ | ‘来れはしない’ |

3.2 形態音韻語: 母音延長の処理単位

統語語が内包する下位単位のもう一方は形態音韻語 (呼称は暫定。その境界は &) である。次掲 (4a) と (4a'-a'') との違い、および、(4b) と (4b') との違いが示すとおり、基底の段階で形態音韻語の末尾2音節が共に軽く、かつ、末尾音節の主音が高舌系^{nucleus}であれば、次末尾音節の主音が2モーラに伸びる (//o// は基底 {o} から表層 /o/ に至る過程の段階)。

¹ 主題助詞の基底形は、前舌母音音素終わりの軽音節に続く時は {=i}、他の軽音節に続く時は {=a}、重音節に続く時は {=wa} (上村 1965: 35-37)。

(4) 母音延長より見る形態音韻語

a. [kɯ̃ː.ɸgu]	a'. [kɯ̃ː.gɯ̃ː]	a''. [kɯ̃ː.gɯ̃ːŋ]	b. [mʲiː.nʲeː]	b'. [tɕiː.kʲiː]
//ka.k <u>u</u> //	//ka.k <u>ua</u> //	//ka.k <u>an</u> //	//mi.z <u>u</u> &a//	//ci.k <u>ii</u> //
{kak-u}	{kak-u=a}	{kak-a-n-u}	{mizu&a}	{cikii}
書<-NPST	書<-NPST=CNFM	書<-STM-NEG-NPST	水&TOP	秤り
‘書く’	‘書くわ’	‘書かん’	‘水は’	‘秤り’
c. [oː.jeː.nʲi]	d. [kũː.bʲi.ŋɐ]	e. [mõː.tɕiː.nɐ.ŋɐn]		
//o.je&z <u>ii</u> //	//ku.b <u>ii</u> &ga//	//mo.c <u>ii</u> &na.ge&n//		
{oje&zi}	{kubi&ga}	{moci&nage-Ø&no}		
俺&DAT	首&NOM	餅&投げ<-NMLZ=GEN		
‘俺に’	‘首が’	‘餅投げの’		

形態音韻語は、(4a) 動詞/形容詞と任意個の助詞^{enclitic}とから成る用言複合体と、或いは、(4b-e) 名詞/副詞と任意個の助詞とから成る体言複合体^{nominal complex}と一致する (本発表に言う用言複合体は宮岡 2002 のそれとは異なり、補助動詞^{auxiliary verb}を含まない)。両複合体は、必要量の派生接辞を取り終えているという形態的特徴を共有しているものの、母音延長の処理回数を異にする。用言複合体が特定の助詞境界においてしか母音延長を処理しないのに対し、体言複合体は助詞境界ごとにそれを処理する。

3.3 語根: 有声化・鼻音化の処理単位

次掲 (5: 太字部) のとおり、瀬上方言においては、<i> /I_[+cːst, -濁]N_[+high]²._N/ に該当しない母音間の清音が有声化し (e.g. /t/ [ɾ], /c/ [z⁰], /k/ [g]), <ii> 共鳴系音素に続く濁音が鼻音化する (e.g. /d/ [n], /z/ [nʲ], /g/ [ŋ])。連濁ないしテ形接尾辞の連声 (黒木 2014) で生じる濁音 (5b-c: 囲み太字部) も同環境で鼻音化する。

ただし、前述の母音間ないし共鳴系音素の後ろであっても、語根 (≡ 学校文法の自立語) の先頭であり、かつ、連濁していなければ ({kij-} ‘切₃’ が接尾辞化した (5a) {-kij-} ‘CPOT’ にも注目)、この有声化/鼻音化は (5d-h: 囲み線部) のように阻止される (これらの点は東北方言に通じる)。

² 具体的には /pi, pu, mi, mu, ci, cu, si, su, ni, nu, ki, ku, hi, hu/。

(5) 清音の有声化と濁音の鼻音化

- | | | | |
|---|---|--------------------------------------|-----------------------------------|
| a. [toi.g ^h iːjɛ̃z̃ẽ.↑ẽiː↑ko]³ | b. [ciːbu.ŋ ^h eː↑g ^h i] | c. [tsuːzun#ŋ ^h otːtoːno] | d. [koːgeː⁴ ŋ ^h eː↑re] |
| /ˈtoi.ki.jaN#si.ko/ | /ˈsi.bu.g ^h a.ki/ | /ˈcu.cuN#ŋ ^h oQ.to.do/ | /ko.kee ŋ ^h a.te/ |
| {toj-kij-an-u=si.ko} | {sibu+g ^h aki} | {cucum(#)coj-u=to=do} | {koko=i ŋ ^h at-e} |
| 取 _る -CPOT-NEG-NPST=だけ | 渋 _い +柿 | 包 _む -CONT-NPST=NML=GEN | 此処=DAT 立 _っ -IMP |
| ‘取り切れないほど’ | ‘渋柿’ | ‘包んでた’ | ‘ここに立て’ |
-
- | | | | |
|---|---|--------------------------------------|---|
| e. [m ^h iː.↑jɯ z ^h etːte] | f. [m ^h iː.↑n ^h ju.ŋ ^h eː↑meː↑i] | g. [eː↑ŋ ^h ei.kuː.ziː↑ne] | h. [dzi.n ^h (^h)eː↑k ^h eː↑ŋ ^h i] |
| /mii.zu ŋ ^h aQ.ta/ | /mii.zu+ŋ ^h a.mai/ | /ˈa.gai+ŋ ^h uu.ci.de/ | /ˈzi.zee+ŋ ^h aa.gi/ |
| {mi.zu ŋ ^h aj-ta} | {mizu+ŋ ^h amaj-i} | {ˈagaj+ŋ ^h uci=de} | {ˈzi-zee+ŋ ^h kagi} |
| 水 COP-PST | 水+溜 _{まる} -NMLZ | 上 _が _る +口=INST | 自-在+鉤 |
| ‘水だった’ | ‘水溜まり’ | ‘玄関で’ | ‘自在鉤’ |

4 結論

本発表では、3種類の処理単位が瀬上方言の語形に関与することを示した。同方言の表層形は、<i> 韻律語において語声調が、<ii> 形態音韻語の次末尾音節において母音延長が、<iii> 語根先頭において有声化・鼻音化がそれぞれ処理されたのちに決まる。

本研究は小方言の共時的音韻論・形態論であるが、ここで明らかにした処理単位3種の機能を踏まえれば、自然言語の出力面の解明や音声合成の精度向上に対する貢献も期待できよう。

なお、統語語/韻律語/形態音韻語/語根の別は次のような階層関係に有る。

(6) 統語語/韻律語/形態音韻語/語根の階層関係

[[[[語根] 形態音韻語] 韻律語] 統語語]

各単位の境界は形態素境界と一致するが、韻律語および形態音韻語の構造は、これまでに定義された音韻的/形態的単位では一般化しがたい。

【記号】 ATT: 限界達成 CNFM: 確認 CONT: 継続相/完了相 COP: 繫辞動詞語根 CPOT: 能力可能 DAT: 与格/向格/所格/様格 GEN: 属格/主格 IMP: 命令 INST: 具格/所格 NEG: 否定 NMLZ: 名詞化 NOM: 主格/属格 NPST: 非過去/限界未達成 PST: 過去/限界達成 STM: 語幹尾

【参考文献】 ◆青井 隼人 (2012)「宮古多良間方言における「中舌母音」の音声的解釈」『言語研究』142、pp. 77-94、日本言語学会 ◆Aoi, Hayato [青井 隼人]. (2017). Phonetic Features of a Laminal Vowel in Tarama-Miyako Ryukyuan. *Journal of Phonetics & Audiology*. Vol. 3 (2). Longdom Publishing SL. ◆尾形 佳助 (1987a)「上甕島瀬上方言の形態音韻論」、九州大学人文科学府・昭和62年度修士論文、未公開 ◆尾形 佳助 (1987b)「上甕瀬上方言の子音体系」、『九

³ 末尾音節の /k/ は、/O_[+cˈst, -濁]N_[+high]/ の一種たる /si/ に続くので、前述のとおり有声化しない。

⁴ A型であるから、期待される表層形は [koːgeː] であるか。

州大学言語学研究室報告』8、pp. 53–82、九州大学文学部 ◆尾形 佳助 (1988a) 「上甕瀬上方言の人称代名詞」、『九州大学言語学研究室報告』9、29–59、九州大学文学部 ◆尾形 佳助 (1988b) 「上甕瀬上方言の音韻の記述」、『日本方言研究会 第46回研究発表会 発表原稿集』(於國學院大學)、pp. 46–54、日本方言研究会 ◆上村 孝二 (1941) 「甕島方言のアクセント」、『音聲學協會會報』65–66、pp. 12–15、音聲學協會 ◆上村 孝二 (1965) 「上甕島瀬上方言の研究」、『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1、pp. 21–49、鹿児島大学法文学部 ◆木部 暢子 (2001a) 「甕島方言の音声の特徴について: 概説と語彙資料集」、真田信治 (編) 『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』(「環太平洋の言語」成果報告書 A4-001)、pp. 125–79、大阪学院大学情報学部 ◆木部 暢子 (2001b) 「鹿児島方言に見られる音変化について」、『音声研究』5 (3)、pp. 42–48、日本音声学会 ◆窪園 晴夫 (2012) 「鹿児島県甕島方言のアクセント」、『音声研究』16 (1)、pp. 93–104、日本音声学会 ◆Kubozono, Haruo [窪園 晴夫]. (2016). Diversity of Pitch Accent Systems in Koshikijima Japanese. *Gengo kenkyū*. Vol. 150. pp. 1–31. The Linguistic Society of Japan. ◆黒木 邦彦 (2014) 「テ形動詞に関する音韻規則の一般性と特殊性」、『語文』102、pp. 1–8 (左開き)、大阪大學國語國文學會 ◆Kuroki, Kunihiko [黒木 邦彦]. (2019). Vowel lengthening for tonal distinction in the Segami dialect of Japanese. *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*. Vol. 22. pp. 33–40. ◆南 不二男 (1967) 「鹿児島県甕島瀬上方言の音韻体系」、『方言研究年報』10、pp. 1–17、広島大学方言研究会 ◆松井 理直 (2016) 「CD モデルにおける閉鎖要素と摩擦要素について」、『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin』19、pp. 57–100、神戸松蔭女子學院大學言語科学研究所 ◆松井 理直 (2017) 「日本語分節音の音韻要素表現とその内部構造」、『窪園晴夫先生還暦記念論文集 (仮題)』、くろしお出版 ◆宮岡 伯人 (2002) 『語とは何か エスキモー語から日本語をみる』、三省堂

[kɯ̄˦.ɾo.kʲç#kɯ̄.nʲi˦ç:.ko] (or [kɯ̄˦.ɾok#—]) 神戸松蔭女子学院大学 kujonjaroo9215@shoin.ac.jp